

【資料紹介】

アメリカの大学における教育諸問題

富 山 忠 三

は し が き

ここに紹介する「アメリカの大学」は、次の書、The Voice of America's Forum Lectures on University. (沖原豊他訳「アメリカの大学十八講」昭和42年4月発行、葵書房)に依拠し、摘出したものである。

本書は、下記のように、18大学の学長あるいは学者による、卓越した教育的識見ならびに教育的経験に基づいて、アメリカの近代的大学の様相を伝えたものである。

もちろん、わが国と米国とは、社会的・学問的風土を異にするが、比較認識による意義は失われないだろう。また本書発行以後に発生した反体制的な今日的学生運動の前景として、あるいは経緯として見るならば、その間の関係概念の構成にも役だちはしないかとおもう。

原書の目次

1章 アメリカの大学とは何か	O. M. Wilson
2章 大学と成人教育	P. H. Sheats
3章 大学と国力	F. L. Hovde
4章 大学と社会移動	R. I. Thackrey
5章 大学と国際協力	J. A. Hannah
6章 国際問題教育におけるリーダーシップ	W. H. Laves
7章 アメリカ大学に学ぶ留学生	J. W. McConnel
8章 工業大学	J. A. Stratton
9章 変貌する社会における大学生	E. D. Eddy

10章	大学の農業研究ならびに農業教育	R. Bradfield
11章	アメリカの実業および産業に対する大学の貢献	H. H. Hatcher
12章	労働者とアメリカ大学	L. Rogin
13章	大学と知識の未開拓分野	C. E. Odegaard
14章	複合文化大学	T. H. Hamilton
15章	大学に関する連邦政府の組織と政策	H. D. Babbidge
16章	州と共にあゆむ大学	F. H. Harrington
17章	大学と都市問題	M. W. Gross
18章	政府と大学の間の人材交流	A. S. Flemming

原書の目次は上記のとおりであるが、筆者は、教育的視角から、その資料を次の如く展開したことを、お断しておきたい。

I 米国大学の史的展開

II 大学論の多様性

- (1) 大学の性格
- (2) 大学の教育課程
- (3) 大学の教育方法
 - (A) 大学生の量的増大と教育の質
 - (B) 変貌する社会における大学生
 - (C) 大学教授の群像と研究態度
 - (D) 産学協同体制

I 米国大学の史的展開

アメリカの高等教育機関の歴史を概括して、Charles E. Odegaard (ワシントン大学⁽¹⁾学長) は次のように述べている。

(1) Charles E. Odegaard は、1911年イリノイ州のシカゴハイツに生まれた。ダートマス大学とハーバード大学に学び、1937年哲学博士 (Ph. D) の学位を得た。ハーバード大学・ラドクリフ大学・イリノイ大学・ミシガン大学で教鞭をとり、ミシガン大学では教養学部⁽¹⁾の学部長をつとめた。国際哲学・古典学会議の会長その他数種の諸学会の委員を歴任し、5つの名誉学位を受けている。本原書執筆当時はワシントン大学の学長であつた。(第13章大学と知識の未開拓分野 p. 227)

- 現代のアメリカの大学は、三つの異なった影響の混合物である。すなわち、
- 1 第17世紀のイギリスおよびスコットランドの諸大学に由来する植民地時代における大学の古典的な伝統の影響。
 - 2 研究的色彩の強い19世紀のドイツ大学の科学的革新の影響。
 - 3 学問およびその利用に対する実用的な典型的にアメリカ的な研究態度の影響。

植民地時代の大学および19世紀の中葉に至るまでの大学は、現代の大学とは非常に異なっていた。それは新しい知識を発見する機関では決してなく、過去の学問を守り、それを若い世代に伝達する教育機関にすぎなかった。

もっとも教授たちの中には、自己の独創力に基づいて因襲的な型を破り、独創的観察や新しい発見に関心を示す教授も皆無ではなかったが、大多数の教授たちは、主として医学・法学・説教・教育などのいわゆる「学問的」職業への志願者に、伝統的な学問を、ほどよく伝えることだけをその仕事としていた。

その教育内容は、ギリシャ語やラテン語の古典によって、古代人の思考・思想・行為について学習させた。この種の書物中心主義の教育は、いわば今日の「一般教養的教育」に類似し、職業的専門教育とは縁遠い種類のものであった。

しかし、この種の教育は、人間的境遇に関する一定の展望を与え、人間社会において、採るべき道を、数多く知らずことによって、視野を広げ、狭量な地方主義から開放されたエリートを形成するという意味の一般的効用はもっていた。

上のような一般教養的教育の理念は、いまもなお、アメリカ大学の伝統の一部となって存続し、専門教育の履修者にも適合するものと考えられている。

19世紀後半になると、大学教授になるために欧州大陸に留学するものが続出した。彼らは、そこで自然現象の観察に、詳細な分析と仮説の実験的検証のための実験室、科学および人文的な文献の体系的利用法、同僚の研究の批判的評価、さらに宇宙と人間的現象の本質を研究するための諸方法の精密化とそれへの研究態度について修得することができた。そして、このよう

な研究によって、その諸成果が信頼できる正確さをもった新しい知識に生産されることを知った。

また彼らは『ドイツの大学の経験に触れ、知識自体の本質的な価値を認識し、そのために新しい知識を体系的に追求することに情熱を燃やした。このような研究は、現在しばしば、純粋科学もしくは基礎科学への関心、あるいは知識のための知識への関心などと呼ばれている。かくして初期の大学が、人間の本質について抱いていた人文主義的な強い関心に対して、新しい科学的な研究態度が知識への情熱をつけ加えたのである。』⁽²⁾

他方、ドイツ型大学の新鮮さと知的活力に感銘したアメリカの教育指導者たちは、自国の高等教育の改造に着手した。すなわち学部学士課程の設定、総合大学型の大学院課程の創設など。さらに彼らは、研究的な訓練を受けた諸教授を獲得する課題に直面し、また大規模な図書館・科学的収集品・専門的な実験室や観測所などを整備しなければならなかった。とくに教授たちが、十分な研究時間をもつように授業負担の軽減に配慮しなければならなかった。

このような大学の再編成には、巨大な財源が必要となる。その要求のすべてが充足されたわけではないが、多くの場合、カレッジを総合大学に発展させ、ドイツの諸大学の博士号を取得するための必要条件に匹敵する諸課程や、その他の教育経験を用意することには成功した。

かくして第一次大戦までに、研究的伝統が多くの権威ある大学に十分に定着したので、もはやアメリカ人は、専門的知識分野において高度な訓練を受けるために、大挙して外国へ行く必要はなくなった。

新しい科学的研究方法によって、人間と知識への関心が情熱をおびてきたのに加えて、行為、すなわち「いかにそれを行なうか」という典型的なアメリカ的関心がたかまってきた。それはアメリカの事情がもつ特殊な必要性の結果にはかならない。

すなわち開拓者達は、故国の土地の地域的特殊性・その利用の可能性や危険性に関する伝統的知識や技術を、アメリカの新天地に、そのまま利用することはできなかった。そこで新しい知識と技能を、また必要な道具や資材を準備するという切実な実際的要求に迫られたのである。第一に農業や工業の分野における知識へ実用的なアプロ

(2) 第13章 大学と知識の未開拓分野 pp. 229~32.

一チが要求され、それが展開に大学が役だたねばならなかった。

そうして、学問の実用化が発達し、それが伝統的に今日の大学に引きつがれているのである。

さて問題は、アメリカの大学は、将来どの方向に歴史的展開を遂げるであろうか、遂ぐべきかの問題であるが、それへの確答は誰にとっても不可能であろう。そこで問題を将来の展望という視点で取りあげると、Walter H. C. Laves (インディアナ大学の政治学主任教授)⁽³⁾ の見解を摘出することができよう。すなわち

『アメリカの高等教育は、慎重に、しかもかなりの速度で世界的方向へ向って進んでいる。そうすることによって、アメリカの大学は、全人類のための知識の探求をめざして、ますます他国民との関係を深めてゆくことである⁽⁴⁾。』と。

II 大学論の多様性

(1) 大学の性格

『大学とは何か、またいかなるものであるべきかについては、多くの考え方があつた。現代の総合大学は実に多様である。』と Julius A. Stratton (マサチューセッツ工業大学学長)⁽⁵⁾ はいう。

まことに、今日の総合大学には、学生量の急増・教育の質的低下・学生疎外の教育の問題、他方、教師の研究負担や大学の社会的責任の問題などが山積し、そして、それらの問題に随伴する種々の圧力の渦中に巻き込まれる危険性の問題など、かつての大学の予想もしなかつた種類の問題が統発してき

(3) ハミルトン大学・シカゴ大学の教授を歴任し、また国際関係の問題で重要なポストについた。

(4) 第6章 国際問題教育におけるリーダーシップ p. 113.

(5) Julius A. Stratton は、1901年シアトルに生まれ、ワシントン大学・マサチューセッツ工業大学およびチューリッヒの工業大学に学び、1927年、理学博士 (Sc. D) の学位を得た。マサチューセッツ工業大学で、電子工学研究所長・教務部長・理事および理事長・学長代理などを歴任し、1959年以来、同大学の学長をつとめた。また博士は国際的に有名な科学者ならびに教育者であつて、軍関係から功労賞や表彰状を、英国電気学会からファラデー賞などを授与されている。(第8章 工業大学 p. 137)

た。それらの問題は、その正当・妥当な解釈すら容易ではなく、ましてその解決には困惑せざるをえない事態が多くなってきたのである。

そのような、大学問題の複雑性・多様性や深刻性を無視して論議を進めることは、現実遊離のそしりは免れないが、ここでは米国の大学人が大学問題をいかに考え、処理するか的一端を伝える意味で、諸識者の見解を紹介せんと試みることにした。

まず大学の性格を、教育の目標を視点として Stratton は次のようにいう。『総合大学は、過去の蓄積された学問を保持し解釈し、その遺産を後世の学生たちに伝えるための手段である。すなわち、総合大学は、人文・社会・自然の諸科学の教育を通じて、個人の一般的教養を高める役割を果たしている。しかし総合大学は、このような基礎的な教養を与えるだけでなく、多くの高等な専門職業のための専門的な訓練を施している。そのように、真の意味の総合大学は、すべて、われわれの知識の貯え（文化財—筆者注）を増し、学問の進歩に貢献すること、すなわち研究を行なう責任を負っているのである⁽⁶⁾』という。

また F. L. Hove⁽⁷⁾（パーデュ—大学学長）は『大学は学問のセンターである。』とあって、次のように説明した。

1. 大学は、それぞれ多くの点で異なっているが、相互に関連した役割を持っている。まず第一に、大学は学問のセンターである。つまり、大学は、社会の知識全体の維持者である。
2. 大学の第二の役割は、知識が知識を生み出す点にある。もし大学が、書を鎖で書架につないでいた中世の図書館以上のものであろうとするならば、大学は、大学自体と世界のために、その蓄積してきた学問を新しい知識を生み出すために利用しなければならない。このような研究と学問とは、大学の諸活動の中でも非常に重要な事項に属している。
3. 第三に、大学は教育のセンターである。学部段階における一般教養的な教育と、専門教育との間に区別がなされていることがある。この種の区別

(6) 第8章 工業大学 p. 139.

(7) ミネソタ大学・オックスフォード大学卒業、ミネソタ大学・ロチェスター大学の教授を歴任・また米国政府の諸要職にもついている。

は、一応の妥当性もつが、広義においては、実際上なんらの区別もない。大学は、学生が成人としての義務と責任を果すように教育している。青年男女を社会から尊重される価値ある成員に教育する場合に、一般教養的教育が、特定の専門教育課程よりも究極的に価値がないとは考えられないのである。

4. 第四に、大学は伝統的に討論の場である。それは思想という産物を交換するための市場である。つまり大学は、教育や学問のある人が、思想という通貨を交換手段として自由に意見を表明し、自由に批判することのできる場所である。

5. 最後に、大学は一つの組織である。つまり、組織体としての大学は、教職員と、物的施設と、大学の他の責任を十分に遂行するために必要なその他の資源とを結集することを、その機能とする協同体⁽⁸⁾である。』

なお大学が、学問のセンターであるということは、単に在学生にだけに限定されるものではなく、卒業生、さらには一般人の、生涯の知的貯水池たるべきであると、有名な文化人類学者 Margaret Mead は次のように述べた。『今こそ、われわれは大学というものを、その卒業とともにいわゆる「教育された人間」を生み出す垂直的な制度としてではなくて、むしろ一生涯を通じて利用しうるような水平的な制度、いわば各人が必要に応じて浸ることができるような貯水池として考えるべき時である。』と。

上述のように、大学の目標を、個人の発展形式に見出す見解と同様に、社会的発展形式の中に見出す見解は、教育学上の普遍的・妥当的な考え方であることは、あらためて言うまでもない。

『現代の総合大学は、とくにアメリカにおいては、過去の古典的な理念から急速にそれつつある。社会の大きな政治的社会的な動きに超然として象牙の塔にたてこもっているような大学は、今日ではほとんどないといってよい。逆に、大学は、ますます時代の生活の中に引き入れられ、地域社会や産業や国家の政治などと、諸種の面⁽⁹⁾で数多くつながりをもっている。』

(8) 第3章 大学と国力 pp. 50-51.

(9) 第8章 工業大学 p. 139.

また、カリフォルニア大学の Clark Keer 学長も、同様な意味のことを、次のようにいう。

『大学は、地域的・国家的・国際的な共同社会の社会的・経済的進歩のために貢献する義務があることを、ますます痛感している。すなわち大学はもはや共同社会の主流から遊離した象牙の塔として考えられなくなってきている。⁽¹⁰⁾』

『基本的には、総合大学は社会的な機関である。それは、どこに存在していても、その国および国民の歴史と伝統とに深く結びついている。どの国においても、大学の形態・将来の見通し、行動などは、それぞれその独自の国家的性格を反映している。大学は、国家的な要求や熱望を満たすものでなくてはならない。

大学のもつ真に本質的な関心は、新しい考え、新しい知識、および若い人々に向けられている。したがって今日の世界では、総合大学は、社会進歩の主要な手段となっており、大学は、その母体となる社会の変化に敏感に反応するものでなくてはならない。⁽¹¹⁾』

上述の目的意識から「大学の性格」を考えると、『過去半世紀にわたって起っている現象は、決して大学の性格の本質的な変化ではなくて、むしろアメリカの社会自体の変化の変化であった』(メイソン・W・グロス学長)という見解も出てくるであろう。

る説したように、上述の諸見解は、大学の目標を視点とする場合に、摘出される性格の重要な一面であって、その普遍的な基本的な考え方に異論の余地は少ない。しかしその理念を実際に貫徹するに当たり、直面するであろう諸障害を、いかに克服するかに関して、方法の正当性・妥当性・可能性について論争されることが、近来、極めて多くなった。さらに問題が「社会の進歩」とか「国家的要求」に関連してくると、その概念規定が統一的に帰一し難いので、その意味・内容をめぐって見解が対立し、大学としての統一的行動原理や行動様式にふみきれない場合も、しばしばある。ここにも大学論の

(10) 第2章 大学と成人教育 pp. 41-2.

(11) 第8章 工業大学 pp. 139-40.

多様性を誘発する要因があるようにおもう。

(2) 大学の教育課程

さきに「米国大学の史的展開」で述べたように「植民地時代の大学」の教育内容は、ギリシャ語やラテン語の古典を中心とする教材主義教育であった。それは、今日のいわゆる「一般教養的教育」に相当し、職業的専門教育とは縁遠いものであった。

大体、『1850年頃の、米国の主要な総合大学やカレッジは、そのカリキュラムや組織の面で、英国の大学、とくにオックスフォードおよびケンブリッジを模範とし、その強い影響を受けていた。⁽¹²⁾』のである。

当時は、ニューマン (Cardinal Newman) の「大学の理念」や、マシューアーノルド (Matthew Arnold) の文化説が、未だ一般にかいしゃされていた時代であったから、その影響も少なくなかったであろう。

しかし、『やがて英国型の高等教育のカリキュラム全般に対する強い批判が起きてきた。そしてベンサム (Bentham)・ミル (John Stuart Mill)・オーエン (Robert Owen) およびその友人たちからなる功利主義者たちの科学に基づく実用的知識の重要性が強調されてきたのである。⁽¹³⁾』

この種の革新的な思想は、やがて米国にその肥沃な土壌を見出した。時あたかも米国北部に波及していた産業革命の時流にも投じたので、すくすくと成長していったのである。そして『有用な研究もまた尊厳なものであり、有用な研究と一般教養との結合も可能であると考え、真に専門的な人間の教育は、技術的な研究と同時に、人文的な研究をも、そのうちに含むものでなくてはならない。⁽¹⁴⁾』という思想が次第に広く深く根をひろげていったのである。

さて、職業的専門教育を重視することは、アメリカ的な要求に基づくものといわれているが、これに対する批判がないのではない。すなわち、『米国の大学は、新しい教育課程を創造することによって、あまりにも熱心に社会の要求に応じようとし過ぎるという理由で、国の内外において、しばしば批判を受けている。また、これらの教育課程が、単なる職業的なものの水準まで

低下しないように保証することは、必ずしも容易なことではなかった。⁽¹⁵⁾』と
グロス (ラドガーズ大学長) は述懐している。

第二次大戦は、世界各国の大学に諸種の影響を与えたであろうが、米国では、新しい思想と抱負を与えた。なかんずく「科学と技術の社会的意味」について考えさせたことは劃期的なことといえよう。

それまでは「大学は、専門的職業人、後には科学者を卒業させることによって、その目的と義務を果たした」と考え、「科学と技術の社会的影響」については、ほとんど関心が払われなかった。

『そのような専門的な尊大さ、またその社会的影響の重要性を無視した考え方は、すべて戦争の勃発と、それに伴う科学の驚異的な進歩とによって一掃されてしまった。』とストラットン学長は⁽¹⁶⁾いう。

(3) 大学の教育方法

『アメリカ人の経験が示すところによると、教育課程の成果を決定するものは、学習内容自体より、むしろ、それが表現され、そして学生に提示される幅と深さにある。』とグロス博士はいう。

『米国の大学教育は、周知のように、教科書や参考書の予習に重点がおかれる。これらの宿題は、外国とは比べものにならないほど負担が重く、学生は一定時間内の一定数のページを読破しなければならない。また講義ならびに⁽¹⁷⁾討論も教師と学生のコミュニケーションの重要な手段となっている。』

この学生の「自主的学習」を建前とする学習指導の方針は、その基底に『大学は、教えられるというよりは、むしろ自ら学ぶにふさわしい場所であ

(15) 第17章 pp. 303-4. 因に Masson W. Gross は、1911年にコネティカット州のハートフォードに生まれ、英国のケンブリッジ大学およびハーバード大学に学び、1938年博士 (Ph. D.) の学位を取得した。博士の専門は哲学であって、ハーバード大学およびコロンビア大学で教育に従事し、1946年以降、ラトガーズ大学において教鞭をとり、その間大学内のあらゆる重要な地位を歴任し約10年間教務部長をつとめ、1959年以来学長の職についている。現在、教育テスト事業所の理事や専門分野における重要な専門学会の会員である。

(16) 第8章 p. 148.

(17) 第7章 アメリカの大学に学ぶ留学生 p. 129.

る。』(O. Meredith Wilson ミネソタ大学長) という精神の存在を窺知できるであろう。

上のことから、ややもすれば、学習は学生の仕事であって、教授の仕事は、文化遺産の伝達で終り、あとは自己の研究に没入すれば足るという観念が生じ易いのである。

『とくに数千人の学生を収容している大学では、教育は、とかく非人間的になりがちである。教授は、ある特定の科目を教えるだけであって、自分の講義に出席している学生は、彼にとって全く関心外の存在である。換言すれば、当該学生が、その科目を理解するか否かは、その学生の問題であって、教授の関知しないことである。』⁽¹⁸⁾ という学生疎外の教育形態が生じ易いのである。

しかし、この種の教育形態が、すべての米国大学の実態ではなく、また、それを最上の方式と考えているわけでもない。講義法を補うために討議法や質問法を併用する形態、あるいはゼミナール式の採用のあることは言うまでもない。

今日の大学生は、決して「裸の王様」ではない。『教育に対する批判の原動力は、学生の心そのものである。』(ウィルソン学長) という言葉は意味深長である。また教授方式の考え方について Eddy 学長 (ピッツバーグのチャタム大学) の次の文言は示唆に富んでいるとおもう。

『もし学生が、ただ単に特定の仕事のために教育されるのではなくて、洞察力と謙虚さをもって、その仕事に取りくむように教育されるならば、その貢献はとくに大きいものとなるであろう。』⁽¹⁹⁾

次に教育の方法に重要な作用を及ぼす学生と教師との問題について簡単に触れてみよう。

(A) 大学生の量的増大と教育の質

米国において、『大学在学者と同年令集団との比率を10年毎に観察すると、

1930年 12.4%

1939年 14.2%

(18) 第7章 アメリカの大学に学ぶ留学生 p. 128.

(19) 第9章 変貌する社会における大学生 p. 156.

1950年 25.7%

1960年 37.6%

のように大学生の数が逐年、上昇率を示している。将来予測される大学在学者の数を、これらの数と比較することは困難であるが、2000年には、大学生の同年令集団との比率は、現在の2倍以上となり、絶対数は4倍になるものと推定⁽²⁰⁾されている。

これを大学院段階でみると、1930年に、大学院在学者の総数が、学部卒業者の約10%であったものが、1960年には25%まで増大している。また1961—62年に実際に大学院へ進学した者の合計は、調査対象となった学部卒業生の33%以上であった。つまり学士課程を修了した学生の約 $\frac{1}{3}$ ⁽²¹⁾が、大学院へ進学したのである。』

学生数の増大に伴い懸念されるのは、教育の「質的低下」である。この点についてウィルソン学長は次のように警告している。

『大学の在学者は数的には増加しているにもかかわらず(問題にされてはいるが、なお——筆者注)十分に注意を払わなければならない。この点⁽²²⁾については、いかなる妥協も許されない。』ところで、『水準の低下をもたらす恐れのあるきびしい統計的資料があるにもかかわらず、それとは別に、多少の楽観を許すような事実が二つある。その第一は、高校卒業生が以前より一層すぐれた教育を受けて大学へ進学してきたという事実であり、第二は、現在の大学生は以前よりも一層すぐれた動機をもち、しかも一層真剣であるということである。大学生は学ぼうという決心に燃えており、自分の意欲をくじく⁽²³⁾ような教師を無視してしまう。』

学生の量的要因と教育の質との因果関係については、しばしば問題にはされてきたが、その確定的な回答はえられていない。

この量的増大に関して、ウィルソン学長は『結論として多数の学生が高等教育を受ける機会を要求していることは、アメリカで、大学がいかに高く評

(20) 第1章 アメリカの大学とは何か pp. 24-5.

(21) 同章 p. 26.

(22)(23) 同章 p. 26-7.

(23) 同章 p. 27.

価されているかを示す一つの目安であると考えてよからう。それは必ずしも希望的な観測ではない。大学を志願する者が多いということは、質への信頼のあらわれであり、また教育が現代生活に関連している証拠でもある。アメリカで何十万という人々が教育を求め、教育を尊重していることは、教育量ばかりではなく、質の点においても充実発展してゆくことを保証するものにほかならない。』⁽²⁴⁾

上記のような楽天的な見解が妥当的に成立するか否かは、観念的にきめられるものではなく、教育の実態に即して判定していかねばならぬことは言うまでもない。

(B) 変貌する社会における大学生

わが国でも、青年期特有の行動様式ないし価値体系を、とらえようとする Youth Culture 研究が、青年期に関する社会学的研究の中心的テーマになっている。(日本教育社会学会編「青年期の教育」教育社会学研究第22集 p. 5)

これに関連して Eddy 博士の所見を要約して述べてみよう。

『最近、とくに過去10年間に、米国の大学生の態度と価値観に関する多くの研究がなされてきた。これらの研究の中には、客観的で権威のある研究もあるが、十分な立証もなしに結論を引き出し、人々に誤解を与えている研究もなくはない。

その研究の一つの興味ある結論は、学生が生活している特定の時代が、学生の態度と価値観の形成に対して、学生の履修している特定の科目と同等もしくはそれ以上に重要な影響を及ぼしているということである。』⁽²⁴⁾

バッサー女子大学 (Vassar College) の後援の下に施行した大学生に関する大規模な研究は、『学生の価値観ならびに態度や関心は、ほぼ10年毎に、その時代の社会的風潮にしたがって変化する。』⁽²⁵⁾ ことを示している。

ところで最近の15年間に、米国の大学生には、若干奇妙な現象が起ってきた。第2次大戦が終り、世界は挙げて平和を追求したあの興奮がさめてくると、大学生は、国家と同様に当初にもっていた強烈な情熱を失って、彼自身

(24) 第1章 pp. 29-30.

(24)(25)(26) 第9章 変貌する社会における大学生 pp. 158-9.

の個人的な世界以外のものには、全然、関心を失なってきた。端的にこの時代（1950年代）の学生の態度と価値観の特色をいえば、その著しい「個人中心主義」（Privatism）にある。すなわち、これらの学生の関心は、他に向うよりも、むしろ私的で個人的な問題に向けられていたのである。⁽²⁶⁾』

ところが1950年の終りになると、学生たちの間に突然の変化が生じてきた。それは、あたかも過去の諸変化が、ほぼ10年毎に出現したように、1959年から1960年への暦の切り換えが青年の態度と価値観の変化を要求したかのよう⁽²⁶⁾にさえ思われる。

最初は、この種の変化を代表する学生は少数であったが、最近では次第に増大し、大多数の大学生の中に、この種の変化が、なんらかの形で明確になりつつあると断言することができる。

その変化というのは、60年代の大学生は、国家のおよび国際的な諸問題の効果的な解決に対して、絶えず大きな関心をもち、社会全体に対して永続的に貢献できるような方法で知識を獲得することに、深い関心をもっているのである。⁽²⁷⁾

かくして『学生たちは、これまで考えられないほど真剣に、高い水準の研究に要求される必要条件を身につけようとしている。諸種の講義に出席し、きわめて真剣に学習し、教授に与えられた課題だけでなく、時間の許す限り、それ以上のことをやり遂げようとしている。⁽²⁸⁾』

元来、米国の大学生は、伝統的に諸団体に参加したり、そこで活動したりすることを好まなかった。学生時代を静かな思索と研究に専念してこそ、彼が真に重要である⁽²⁷⁾と信ずる諸問題に取り組み、それに対して積極的な役割を果たすことができると考えてきた。

今日、米国に広く普及している学生グループの一つに「挑戦」（Challenge）と呼ばれるグループがある。これは、世界の諸問題に関する真剣な討議を促進するために組織されたものである。この挑戦グループは、初めはエール大学において非公式に結成されたのであるが、その後、多くの大学に支部を設けて拡大していった。

(26) 第9章 p. 159.

(27)(28) 同章 p. 162.

問題としては、米国の海外援助の妥当性・核実験・世界法・北大西洋条約の機構・東南アジア条約機構の強化方法・民主党と共和党の綱領の評価などがある。

そのような世界的な諸問題に関心を寄せる反面、ナショナリズムには、ほとんど関心をもっていない。偶発的もしくは意図的な核戦争による絶滅の脅威に対しては純粋な懸念を示している。しかし彼らの関心は利己的なものではない。自己と家族の生命が脅かされているから立ちあがっているのではないから、是が非でも、米国を維持することに固執していない。全人類の平和への見通しを深く憂慮し、人類を守ることに大きな関心をもつので、一国を守ることに、さほど関心をもたないのである。

そのような学生の態度に対して、世評は、「高潔な理想主義」と称し、あるいは、あまりにも高潔で理想的で素朴であるともいう。しかし他方では、次代の知的指導力への大きな期待を、その中に見出している人もある。⁽²⁹⁾

(C) 大学教授の群像と研究態度

今日の米国の大学においては、『同一大学内に、論争の様相をもつ若干の伝統が永続化しているのを見ることができる。』

例えば、「人文主義者たちは、専門化した科学の研究方法を嘆き、一般教養的教育に一層大きな位置を与えんとして論議する。これに対して、科学者たちは、彼らの論拠の「あいまいさ」について反論する。また別の教授たちは、基礎科学的な研究方法を強調し、その中には、その研究の純粋性の故に、非実用的知識を賛美し、同僚教授たちが、実用的知識に関心を示すことを、「大学という場所にふさわしくない」と悲しむのである。しかし彼らもまた実践的な教授たちから強い反対を受けているのである。⁽³⁰⁾』

上述のように、今日の米国の大学には、その中に諸種の関心に執着する教授群があるが、これに対して、オデカード学長は、次のようにいう。

『大学内において、大学の教育目的に関して絶えず批判的な問答が繰返され、また疑問が表明されているにもかかわらず、それに対する一致した解答が容易に得られない。しかしそのことは驚くに値しない。

教授団には、一種の興奮性が見られる。異種の研究方法が相互に刺激しあ

(29) 第9章 p. 169.

(30) 第13章 大学と知識の未開拓分野 p. 239.

い、緊張した雰囲気をかもしだしていることは、この活動のすべてを進展させようと努めている学長に対して、たしかに種々な問題を投げかけている。

しかし全体的にみて、この複合的な大学が、かえって米国に対して、十分に役だっていると確信する。⁽³¹⁾』

要するに『大学内部の論争や葛藤は、知識の探求者としての大学の基本的な役割を支えるものであるように思われる。もしも、これらの研究方法のどれか一つが、他の方法を押えて優位にたつならば、それこそ、実際に大きな心配の原因となるであろう。大学においては、科学の革新を行なおうとする動機のほか、人間の伝統に対する関心が常に見られるのである。また、実際的な問題の解決の探究と並んで、無益な好奇心が働いているのに気づくこともある。⁽³²⁾』

上のように、米国の大学人は、大学には見解の相違や、ある程度の混乱は避け難いが、それが却って、偏狭な教条主義の発生の機会を少なくし、革新と柔軟性のために広い展望を開く可能性をつくるという考え方に立っている。したがって、近代科学と旧来の学問とが、ある時は平和的に、またある時は、論争を繰り返しながら共存し続けているのである。

次に教授の研究態度の一端について少し触れてみよう。

『学問は、昔から大学人を見分ける重要な特色であったし、研究は常に大学人の主要な活動であった。』とグロス博士はいう。そして「組織的な研究」を提唱して次のように述べた。

『「組織的な研究」とは、単なる学究的活動以上のものを意味し、大学もしくは大学の一部において、かなり輪郭の明確な一定分野について体系的な研究計画をたて、この計画を実行するために必要な資金や人員を集めようとする慎重な努力を意味する。この種の研究は、大学にとって決して異常なものではなくて、過去80年間に、次第に大学内に定着した最も重要な活動の一つとなっている。』

この「組織的な研究」に、われわれが関心をもつのは、本研究の計画性・

(31) 第13章 大学と知識の未開拓分野 p. 241.

(32) 同章 p. 243.

組織性・慎重な実行性もさることながら、それが各種専門分野の科学者のための研究的センターとして機能するということである。すなわち科学的・社会的・人文的なセンターとして共同研究を行ないうる機関となるということである。米国の大学は、正規の教育と、この種の組織的な研究を通して、その社会的責任を果しているといわれる所以が、ここに見出されるであろう。また「大規模な大学では、知識の伝統的な境界線が互に交錯し、偉大な進歩のための幅広い道を形成している」といわれるには、この種の地道な準備があったことを示さずしてはならない。

教授と学生との協同研究もよく行なわれる。『教授と学生との協同研究によって、学生は専門的な研究方法や知識を修得するだけでなく、それとともに公益の精神を身につけ、人類のより大きな幸福の実現を、その目的とするようになる。』とハリントン博士（ウィスコンシン大学学長）は⁽³³⁾いう。

とくに『教授と学生の協同研究は、アメリカの大学院教育の核心をなしている。それは博士の学位を目ざす最高段階の研究において、とくに顕著である。』⁽³⁴⁾

(D) 産学協同体制

最後に、わが国でも論議の対象になった「産学協同」の問題について、米国の大学における考え方と、その体制を簡約的に紹介することにしよう。

『米国の高等教育の特徴の一つは、大学と実業および産業との間にみられる強力で生産的な関係である。

大学は実業界および産業界と積極的に接触し、その教授たちが技術顧問として産業界に貢献することを奨励し、他方、会社を代表してくる人々のために何百という特別の教科課程を設けている。』⁽³⁵⁾

これに対して、『産業界は、その指導者を大学の理事会に送り、大学の経営を助けている。また、産業界の富豪は、奨学金・研究費・設備費などのために献金し、新設校舎や新計画のための費用にも産業界から補助金が支出されている。

(33)(34) 第16章 州と共にあゆむ大学 pp. 294-5.

(35) 第11章 アメリカの実業および産業に対する大学の貢献 pp. 192-3.

上記のように、大学と産業界は、双方とも相互に利益を得ている。これこそ長年にわたるアメリカ産業発展の基礎となっている自立的な相互作用である。アメリカの資本主義をめざましく発展させた原動力は、このような産学協同⁽³⁶⁾にほかならなかった。』

『米国の大学が、実業・産業界に貢献している第二の主要な領域は、その研究分野にある。すなわち、実業家の拡張と多様化とは、主として、大学の学者ないし大学卒業者によって生み出される新しい知識や情報をいかに獲得するかにかかっている。

したがって、近代的な大学では、教授や学生たちが、実業・産業界の重要な問題に取りくんでいる姿が見られるのである。

これらの研究は、一般的にいて、仕事に必要な技術の開発とか、材料検査といった種類のものよりは、むしろ基礎的な性格を帯びた研究である場合が多い。しかも、この種の研究には、教育的な価値があるので、かかる産業研究計画は、すぐれた教師や学生を生み出すことに役だっている。

上述のように、大学教授たちは、産業研究に関与することによって、その専攻分野の急速な進歩とともに前進することができる。かつて、ある人が、いみじくも指摘したように、このような研究に従事している教授は、教室において、専攻分野の種々な「新事実」を教授しているのに比して、かかる研究を軽視する教授は、ただ単に専攻分野の「歴史」を教えているに過ぎない。

また、このような研究によって、大学の教授計画が現実的なものとなり、教授たちの知的好奇心が促進され、その結果、その学問的な生産性が、ますます向上するであろう。

他方、学生たちも、広い知識をもった教授と交わり、現代の産業問題に取りくみ、最近の研究・技術・装置・手順を学ぶことによって得ることが大きいだろう。

産学協同の第三の領域として、近代的な大学が産業界に対して行なっている奉仕活動を挙げることができる。

既述のように、産業界の顧問として奉仕活動をなしているほかに、商業的

(36) 第11章 p. 193.

な企業に関連した分野の専攻教授たちは、例えば、産業に関する研究計画の立案に参加し、研究成果の正当な評価に助言・勧告する。また生産性の向上や人事の改善方法を提示し、新設会社の市場分析や販売・賃金・俸給管理・契約書作成の計画において、その指導および助言を行なっている。

既述のように、大学としては、学外での奉仕活動は奨励するが、無制限に許可しているのではなく、時間的に制限している。例えば、ミシガン大学の⁽³⁷⁾場合は、教職員は、顧問として一週一日の学外活動を認めているのである。』

あ と が き

はじめに述べたように、ここに紹介した大学人は、大学の学長ないし科学者であり、また長い教育的キャリアをもつ教育者である。その教育論は、それぞれの経験的熟知と認識的識見を、当面の教育的環境との対応で昇華したものにちがいない。

もちろん、その所論は、今日的な学園紛争のせん鋭化した時代の前景的時代の所産であることは否定しないが、戦後アメリカの教育制度を導入したことも無関係でないわが国の大学の問題性を認識する上に、若干でも資することがあればと、敢えてここに紹介した次第である。

(37) 第11章 pp. 196-202.